

関東向け集成材輸送を鉄道シフト

岡山県真庭市に本社を置く銘建工業(株)は、1923(大正12)年創業の木質建材メーカーである。真庭市内に5工場とWOOD BOX(物流倉庫)を構え、集成材やCLT(Cross Laminated Timber)、製材の製造を主力事業としている。

集成材は、乾燥させた木材を接着して一体化した構造用木材で、強度や品質の安定性に優れ、住宅から大型建築物まで幅広く利用されている。一方、CLTは木材を繊維方向が直交するように積層接着した大型パネルで、軽量かつ高強度であるほか、断熱性に優れ、反りや伸び縮みが少ない。さらに、工場であらかじめ加工するため、施工期間の短縮が可能だ。同社は、国内初のCLT量産工場を有するCLT業界のリーディングカンパニーとして、国産材を活用した高品質なCLTの製造・普及を推進している。また、大阪・関西万博のシンボル「大屋根リング」に使用された集成材・CLTの約3分の2を供給した実績を持つ。

「あるものを使いきる あるものから新しい価値をつくり出す」を理念に掲げる同社は、資源の循環利用にも力を入れている。製造工程で発生する木くずなどの副産物は、自社発電設備の燃料として活用するほか、木質ペレットとして製品化し、ストーブなどの燃料として利用されている。また、地域企業や自治体と共同で運営する真庭バイオマス発電所では、製材端材や未利用材を燃料として活用し、地域資源の循環型利用を実現している。



柳取締役

同社は2026年5月から、関東地区のプレカット工場向け集成材輸送の一部を、トラックから鉄道へシフトした。現在、岡山(タ)ー宇都宮(タ)間で31ftウイングコンテナを利用し、週3便の輸送を行っている。

営業部の柳征治郎取締役は「建材物流はこれまでトラック輸送が中心でした。しかし、ドライバー不足や燃料価格の高騰、2024年問題への対応など、輸送を取り巻く環境は大きく変化しています。宇野港(岡山)から有明港(東京)までのRORO船も活用していますが、岡山から関東まで将来的にも安定して製品を届けられるのかという課題意識がありました。トラックや船に加え、新たな選択肢が必要だと感じていたのです」と振り返る。そうしたなか、JR貨物からの提案をきっかけに鉄道利用の検討を開始。2026年3月と4月に試験輸送を実施し、本格導入へとつなげた。

柳取締役は、「鉄道があり、トラックがあり、船があり、輸送手



集成材とCLTを活用した本社事務所

段の選択肢が広がり、さらにWOOD BOXという物流拠点もある。お客さまにも安心していただける物流体制が整ってきたと感じています。また、環境に配慮しながら安定して製品を届けるという点でも、貨物鉄道は当社が目指すサステナブルな取り組みとの親和性が高いと考えています」と話す。

31ftコンテナで長尺集成材を輸送



森岡さん

銘建工業が扱う集成材の長さには、2,750mmから5,985mmに及ぶ。そのため、鉄道利用には全長(内寸)9,240mmの31ftウイングコンテナを採用している。

営業部の森岡洸介さんは「試験輸送では、積載時にコンテナのウイング部分やフレームが製品と干渉しないかを重点的に確認しました。バランス良く積載するために長さの異なる製品を組

み合わせる工夫は必要ですが、積載量はトラックとほぼ同等です。荷受け先でも問題なく荷役を行っていただいています」と説明する。

リードタイムはトラック輸送より1日長くなるものの、出荷翌々日には荷受け先に到着する。船舶輸送では1週間以上かかる場合もあり、関東向け輸送では十分実用的な水準だという。

品質面でも手応えを感じている。仕入部の田中修平課長は



WOOD BOX(物流倉庫)



WOOD BOXに保管されている集成材



集配トラックが荷役専用スペースに到着



集成材を31ftウイングコンテナに積み付ける



ラッシングベルトで固定した後、岡山(タ)へ

「今のところ鉄道輸送による品質上の問題は発生していません。トラック輸送では急ブレーキや道路状況によって荷物が動く場合もありますし、船舶輸送では波の影響を受けることがあります。その点、鉄道は走行が安定しており、集成材との相性が良いと感じています」と評価する。

さらに、2025年に稼働したWOOD BOXも鉄道シフトを後押しした。木材は乾燥状態で出荷されるため、水濡れ対策が重要となる。WOOD BOXでは荷役専用スペースを活用することで、雨天時でも製品を濡らすことなくコンテナへの積み込みが可能だ。田中課長は「木材は濡れると変色したり、その後の急激な乾燥によって表面割れが発生したりすることがあります。強度への影響はほとんどありませんが、品質管理は重要です。その点、WOOD BOXの稼働によって、輸送手段を問わず品質を管理しやすい環境が整いました」と話す。



田中課長

ラウンド輸送で鉄道利用拡大を目指す

住宅市場では開放的な空間づくりへのニーズが高まり、長尺の集成材需要も拡大している。また、鉄骨造やコンクリート造から木造へのシフトが進んでおり、強度に優れ、軽量のCLTについても新たな需要が見込まれる。さらに、銘建工業では製品の環境性能を示すEPD*を取得しており、鉄道利用によるCO₂排出量削減効果の可視化にも期待を寄せている。

現在、関東向け輸送における鉄道利用はまだ一部にとどま

るものの、同社では週3便から週5便への拡大を視野に検討を進めている。森岡さんは「関東は大きな市場で、当社でも毎日多くの製品を出荷しています。輸送が事業拡大の鍵となる中、貨物鉄道は安定輸送と環境負荷低減の両立につながる手段だと考えています」と語る。

岡山(タ)ー宇都宮(タ)間では、飲料メーカーとのラウンド輸送を実施している。さらに鉄道利用の拡大に向け、今後は熊本県内の製材関連会社などとの連携も見据え、31ftコンテナを効率的に活用できる仕組みづくりを目指す。

柳取締役は、「製品を運ぶだけでなく、帰り荷として原料となる木材も運べるようになれば理想的です。取引先を巻き込んだラウンド輸送が広がればコンテナの稼働率向上だけでなく、物流全体の効率化にもつながります。今後もJR貨物さんと連携しながら、持続可能な物流体制を構築していきたいと考えています」と展望を語った。

*EPD(Environmental Product Declaration):製品のライフサイクル全体における環境負荷を第三者認証のもとで開示する環境製品宣言

銘建工業
瀬崎さん銘建工業
田中課長銘建工業
柳取締役銘建工業
森岡さんJR貨物
小枝営業担当